

概要

- 本県の水稲作付面積は、「ヒノヒカリ」が75%を占めており、高温障害等による品質の低下が問題となっていた。
- このため、作期分散による気象災害リスク回避と品質向上を目的に「ヒノヒカリ」より早生の高温登熟耐性のある新品種「なつほのか」の導入を図ることとした。普及組織は栽培特性を把握するため県内各地に実証展示圃を設置し、令和4年からの本格導入のため各地で生産者を対象に研修会を開催した。
- 推進の結果、「ヒノヒカリ」より多収で品質が高いことが実証され順調に面積を拡大した。3年目である令和6年は約3,000haを見込んでいる。

具体的な成果

1 作付推進のための実証展示圃を県下各地に設置

- ① 展示圃設置数 R3 22カ所 → R4 24カ所 → R5 16カ所
- ② 展示圃収量 「なつほのか」:538kg、「ヒノヒカリ」:496kg (R5実績)
- ③ 実証圃検査等級 「なつほのか」:1等中、「ヒノヒカリ」:1等下 (R5実績)

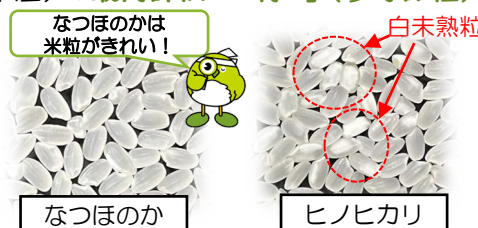


2 飛躍的な面積拡大と「ヒノヒカリ」の偏りの解消

- ① 新品種「なつほのか」の面積拡大 R4 1,152ha → R5 2,049ha → R6 3,000ha (推定)
- ② ヒノヒカリの作付割合 R3 75.1% → R4 69.2% → R5 60.7%

3 品質・収量向上

- ① 日本穀物検定協会が行う米の食味ランキングで2年連続(令和4・5年産)で最高評価の「特A」(参考品種)を獲得
- ② 1等米比率向上 R5年産1等米比率 「なつほのか」:58.0% (R6. 3. 31時点) 「ヒノヒカリ」:50.9%
- ③ 収量向上 生産者からは収量が1袋程度多くなったとの声が多く寄せられている



普及指導員の活動

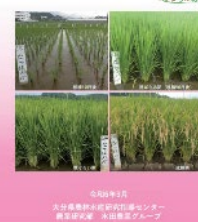
～令和3年

- 高温耐性品種「なつほのか」の導入方針が定められ、普及指導員は目標を達成するため、普及方法や種苗供給体制や共乾施設などについてJA等関係機関と協議を重ね、地域別の推進方針を策定した。
- JAと連携し、地域単位に品種PRの拠点として実証展示圃を設置し、既存品種と比較したデータ取得を行うと共に、定期的に推進研修会を開催した。
- 実証展示圃は、「なつほのか」の品種特性に即した栽培管理指導を重点的に行うことで、既存品種を上回る収量・品質を達成した。
- 実証展示圃の結果をとりまとめ、JAと次年度以降の指導について共有を図った。また次年度のための作付前の講習会を実施した。

令和4年～令和6年

- 試験場と連携し、栽培マニュアルを毎年度更新し作付拡大ツールとして活用している。
- 実証展示圃は継続設置し、地域の情報発信拠点として有効活用している。
- 初年度は台風による倒伏が多く発生したため、次年度以降は水管理の徹底を指導し翌年度以降の倒伏の発生は軽減した。

水稲早生品種「なつほのか」
栽培のポイント



普及指導員だからできたこと

- ・ 実証展示圃では新品種の展示の他に、各地域で課題となった栽培に関する技術実証も行うことで、栽培管理技術の向上が図れた。
- ・ 新品種導入に関して実証展示圃を設置し、新品種導入のメリットを研修会やホームページ、各種資料による周知を図ったことが急速な面積拡大を可能とした。
- ・ 「新品種の産地化」という共通目標に対して、生産者およびJA・行政・試験研究等の関係機関が一丸となって取り組みを進めることができた

大分県

高温耐性品種「なつほのか」導入による産地の活性化

活動期間：令和3年～令和6年度（継続中）

1. 取組の背景

本県の水稲品種構成は平成3年に「ヒノヒカリ」が作付面積1位となり、平成10年以降24年間ほぼ75%を占めていた（表1）。近年では地球温暖化により、「ヒノヒカリ」での高温障害等による品質の低下が問題となっていた（図1）。

こうした中、令和元年～令和2年の水稲の作況が不良となったことから、今後の対策について県・JA本店・全農と協議を重ねた。令和2年に試験場の奨励品種選定試験において「ヒノヒカリ」と比べ作期分散が可能であり多収で高温登熟耐性が優れることから、「ヒノヒカリ」より早生の新品种「なつほのか」が認定品種として承認された。

そこで高温障害や1品種への一極集中による気象災害リスクの軽減を目的として令和4年から「なつほのか」の本格導入が決定した。

長年にわたり栽培されてきた「ヒノヒカリ」からの転換は困難を極めることが予想されたため、関係機関と連携した推進を行なった。

表1 大分県「ヒノヒカリ」作付シェア推移

	平成2年	平成3年	平成4年	平成10年	平成15年	平成20年	平成25年	平成30年	令和3年
作付面積順位	5位	1位	1位	1位	1位	1位	1位	1位	1位
作付面積割合(%)	6.8%	24.3%	31.6%	75.7%	78.9%	75.7%	78.9%	73.9%	75.1%

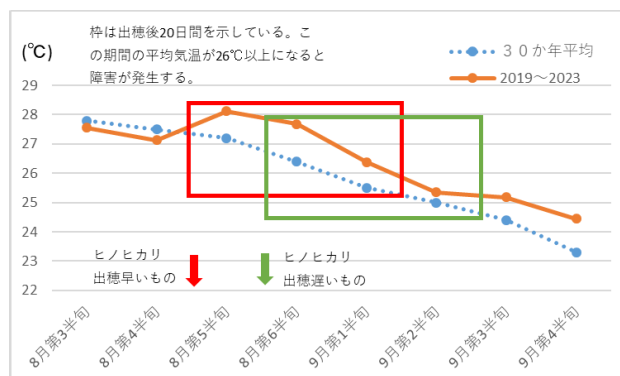


図1 大分県宇佐市平均気温（30か年平均と直近5か年平均）

2. 活動内容（詳細）

（1）関係機関との連携

普及指導員は、令和4年からの「なつほのか」の本格導入にむけてJA等と協議を重ね、地域別の推進方針を策定した。新品种導入に慎重なJAも多く、苗の販売や乾燥調整の受け入れなど、課題を整理しながら段階的に「なつほのか」の推進を行なった。

（2）「なつほのか」栽培推進

品種PRの拠点とするため、地域単位に実証展示圃を設置した。実証展示圃

は、栽培技術に精通し地域の信頼の厚い生産者を JA と選定した。

実証展示圃では、「なつほのか」の品種特性に即した栽培管理指導を重点的に行うことで、既存品種を上回る収量・品質を達成した。初年度は台風による倒伏が発生したため、次年度に向けては水管理の徹底を指導し翌年以降は倒伏の発生は軽減した。また実証展示圃では各地域で課題となった栽培に関する技術実証も行うことで、栽培管理技術の向上が図れた。

推進にあたっては、各拠点ごとに栽培研修会を定期的を開催した。実証展示圃の結果は研修会で説明するほか、チラシを作成し機会を見つけ配布を行った。ホームページでは実証圃の栽培の様子を発信したり、「ヒノヒカリ」との比較などを掲載し推進の一助となった。



「なつほのか」栽培研修会



「なつほのか」実証展示圃

(3) 「なつほのか」栽培マニュアル作成

普及指導員と試験場との連携により栽培マニュアルが作成された。毎年度、試験結果や実証展示圃の結果を反映しマニュアルを更新している。

水稻早生品種「なつほのか」栽培のポイント

令和5年3月
大分県農林水産研究振興センター
農業研究部 水田農業グループ

「なつほのか」の特徴

中晩熟の早生品種。比較的早い生育で、生育期間が短い。生育初期は倒伏が少なく、生育後半は倒伏がやや多い。生育後半は倒伏がやや多い。生育後半は倒伏がやや多い。

生育特性

- ① 生育初期は倒伏が少なく、生育後半は倒伏がやや多い。
- ② 生育後半は倒伏がやや多い。
- ③ 生育後半は倒伏がやや多い。

収量・品質特性

- ① 千粒重が25g程度重く、1割程度多収。
- ② 検査等級は同程度で優れる。
- ③ 検査等級は同程度で優れる。
- ④ 検査等級は同程度で優れる。

品種名	生育期	千粒重	1000粒重	1000粒重	1000粒重	1000粒重	1000粒重
なつほのか	6/23	22.9	4.3	4.3	4.3	4.3	4.3
ヒノヒカリ	6/23	21.6	4.3	4.3	4.3	4.3	4.3

「なつほのか」栽培マニュアル

3. 具体的な成果（詳細）

(1) 作付推進のための実証展示圃を各地に設置

実証展示圃は、令和3年に22カ所設置し、本格導入された令和4年には24カ所、令和5年に16カ所設置された。実証展示圃の収量は令和5年実績で、「なつほのか」538kg、「ヒノヒカリ」496kg、検査等級は「なつほのか」1等中、「ヒノヒカリ」1等下と収量・品質ともに「ヒノヒカリ」を上回ることが実証された。

(2) 飛躍的な面積拡大と「ヒノヒカリ」への偏りの解消
「なつほのか」は令和4年に本格導入され、初年度に一気に1,152haと拡大した。実証展示圃生産者の「なつほのか」に対する評価は高く、各地域での面積拡大に大きな役割を果たした。令和5年は2,049haとなり、令和6年は3,000haを見込んでいる。「ヒノヒカリ」の作付割合は令和4年に69.2%、令和5年に60.7%と年々偏りが解消されつつある。



(3) 品質・収量向上

品質については、令和5年産で1等米比率「なつほのか」58.0%、「ヒノヒカリ」50.9%と「ヒノヒカリ」を上回った(令和6年3月31日時点)。加えて日本穀物検定協会が行う米の食味ランキングで、参考品種であるが2年連続(令和4・5年産)で最高評価の「特A」を獲得した。

収量については、実証展示圃の試験結果と同様に生産者からは収量が1袋程度多くなったとの声が多く聞かれた。



知事へ特A報告会

4. 農家等からの評価・コメント(国東市安岐町町K氏)

「なつほのか」を作ってみると収穫時期が早く、作期分散ができ労働時間の平準化が図れた。また、夏の高温でも米粒が白くなりやすいことから品質も高くなった。食べた感じも、粒が大きく、甘みと程よい粘りがあり、特Aを2年連続で獲得できたことから改めて食味の良さを感じた。

5. 普及指導員のコメント(広域普及指導員・古寺氏)

「なつほのか」は導入当初から評判が良い品種で、順調に生産面積を拡大している。今後も気象や病虫害発生による対策などを迅速に指導することで、生産者の所得の安定化につなげたい。

6. 現状・今後の展開等

新品種「なつほのか」は計画的に導入が進み、「ヒノヒカリ」への一極集中が年々解消されている。その結果、県全体の品種構成の改善により気象災害等のリスク軽減に繋がった。また、県全体に導入が進み、地域ごとの既存品種と比較した際の「なつほのか」の品質の優位性が明らかになった。今後は、高温耐性品種である「つや姫」等も合わせて、高温による品質低下が顕著な地域を中心に推進を図っていく。